

Title	名詞化表現に関する一考察 : 英語と日本語の比較
Author(s)	石野, 牧
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1997, 31, p. 31-45
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47875">https://hdl.handle.net/11094/47875</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 名詞化表現に関する一考察

— 英語と日本語の比較 —

石 野 牧

## 1. 序

名詞化(Nominalization)と呼ばれる言語現象は、統語的側面を中心に換言すると、本来名詞以外である統語的範疇を、特定の統語的操作によって(統語範疇上)名詞に変化させることである。このような名詞化という現象に関して先行研究では、語彙上の名詞化・統語上の名詞化という区別がなされてきた。そのような違いを設ける要因の1つとして、名詞化された表現中の目的語の格標示の仕方の違いが重要なものとして挙げられてきた。本稿では、英語と日本語に見られる名詞化表現のうちの特定の種類のもの、英語では名詞化接辞(nominalizing affix)の1つである“-ing”、日本語では同様に名詞化接辞である“-kata(方)”と形式名詞(formal noun)の1つである“no(の)”が用いられている表現を取り扱う。次節においてこれらの形態上の特徴に注目し、英語の“-ing”について先行研究(cf. Abney(1987))での分析とは異なる分析を提示することで、英語と日本語における名詞化表現の統語上の対応関係を明らかにする。更に3節において、構造格の認可の統語的メカニズムに関して生成文法の枠組みでの理論的な提案を試みた後、統語上の名詞化における目的語名詞句の格標示の仕組みを具体的に考察することによって、派生的アプローチにおける名詞化の分析に対して新たな見解を提示する。4節は結語にあてる。

## 2. 統語上の名詞化

### 2.1. 英語

まず、英語の名詞化表現のうち最も抽象的で意味上の貢献が少ないと思われる名詞化の例として“-ing”による名詞化を取り上げる。“-ing”は名詞化接辞(nominalizing affix)もしくは動詞屈折接辞(verbal inflectional affix)として必ず動詞の語幹と結合していなければならない。従来の研究では、名詞的な表現として分析の対象とされてきたものとして以下の様な例が挙げられてきた。

- (1) a. a Japanese *painting*  
 b. the *handing* of bottles to babies  
 c. John's *handing* a bottle to his baby  
 d. John *handing* a bottle to his baby

(1a)では統語構造に導入される際に既に“painting”という名詞として扱われ、語彙上名詞化されたものが名詞として定着したものと考えられるが、(1b-d)のような慣習的に各々“Ing-of・Gen-ing・Acc-ing”と呼ばれている動名詞構文(gerundive constructions)は、その統語的ステータスに関して未だ議論の余地のある構文である。<sup>1)</sup> Baker (1985) や Abney (1987) は(1b)を語彙上の名詞化、(1c, d)を統語上の名詞化として区別しており、その理由として主に目的語名詞句の格標示の違いを取り上げている。つまり、(1b)のようなIng-ofではその目的語である *bottles* が対格で標示されるのではなく *of* を伴っている一方、(1c, d)のようなGen-ing・Acc-ingでは対格標示されていることから、Ing-ofについてはV-ingが語彙上既に名詞であると主張するものである。しかしながら本稿では、Ing-ofは語彙上の名詞化ではなく統語上の名詞化であり、Acc-ingは統語上の名詞化の関与しない構文であると主張する。

語彙上の名詞化と統語上の名詞化の区別に関しては、項構造の変化の有無にその違いが求められるであろう。Lieber (1992: 117) では英語の接辞と項構造の変化の関係が述べられている。項構造が各々の語彙のレベルで決定されているものであるならば、語彙上の接辞と統語上の接辞の違いは、その接辞が基底の語の項構造を保持するかどうかにかゝる。

(2) a. bake + er : a baker of cakes

b. legal + ize : They legalized gambling.

(3) hand + ing : the handing of bottles to babies

(2a) のような“-er”による名詞化の場合は、“-er”という接辞が基底の動詞である“bake”と関連する主題役割の1つ、ここでは外項であるAgentを束縛している。逆に(2b)のような“-ize”という使役の動詞接尾辞の場合は、基底の形容詞“legal”に外項を新たに加えることになる。これらに対して(3)のような“-ing”の用いられているIng-of構文の場合は、接辞によって基底の動詞“hand”の項構造が変化するというのではなく、基底の動詞の持つ項構造が継承される。<sup>2)</sup> 項構造の決定が語彙のレベルであれば、(1b)や(3)のようなIng-ofは項構造における主題役割の増減がないという点から、語彙上の名詞化ではなく統語上の名詞化として扱えるだろう。

また(1d)のAcc-ingに関しては、(4)が示すようにGen-ingと交代可能であり意味上の差異も認められないことから、統語範疇上同じ範疇の構文であるとの分析がなされてきた。

(4) I remember {his/him} driving his father's car.

しかし(5)の例が明示するように、Gen-ingとAcc-ingは同種の構文では等位接続が可能であるのに対して、お互いには等位接続が不可能であるという事実がある。

(5) a. I remember John's playing the violin and the men's singing the song.

- b. I remember John playing the violin and the men singing the song.
- c. \* I remember John's playing the violin and the men singing the song.
- d. \* I remember John playing the violin and the men's singing the song.

そこでGen-ingについては“-ing”を名詞化接辞として分析し、Abney (1987) やValois (1991) などに従って範疇全体をDPとする。一方Acc-ingについては(5)のような等位接続の例から範疇全体はGen-ingとは異なると結論づけることが妥当である。<sup>3)</sup> そこでAcc-ingにおける“-ing”は名詞化接辞ではなく、むしろ、構造上純粹に動詞の屈折語尾として働き、範疇全体は統語上の名詞化を受けていない補文としてのTPであるだろう。

以上、“-ing”を含む構文の中で従来名詞的な表現として一様の分析が与えられてきた構文について、異なる観点と新たな統語的事実による別の分析の可能性を提案した。統語上の名詞化の対象としてIng-ofとGen-ingだけを扱い、その目的語名詞句の格標示の違いについては3節において分析を試みる。

## 2.2. 日本語

では、日本語についてはどうであろうか。まず“no”についてであるが、統語上の振る舞いに影響を与える点で英語の“-ing”と大きく異なることはその形態的特徴である。意味上(6)のように1つの独立した代名詞の働き(“no” = *aidea*)をすることからも明らかであるように、“no”は形態素として独立した存在である。<sup>4)</sup>

- (6) [John ga teian sita aidea/no] ga itiban omosiroi  
 Nom proposed idea/one Nom most of all interesting  
 ‘The idea/one that John proposed is the most interesting.’

(Murasugi 1991: 77)

名詞化については“-ing”と同様に、最も抽象的で意味上の負担が少ない形式名詞として広く用いられる。

(7) a. [Hashi-ru *no*] to [oyog-u *no*] to dochira-ga suki de-su-ka?

run FN or swim FN which-Nom like

‘Which do you like, running or swimming?’

b. Boku-wa [Arimori-no hashit-te i-ru] *no-o* mi-ta

I-top Arimori-Gen run be-pres FN-Acc see-past

‘I saw Arimori running.’

c. Boku-wa [Arimori-ga hashit-te i-ru] *no-o* mi-ta

I-top Arimori-Nom run be-pres FN-Acc see-past

‘I saw Arimori running.’

(7)の場合、“no”自体が独立した形態素であることから全てにおいて統語上の名詞化である。目的語がある場合は対格で標示されるため、英語の“-ing”と比較すると統語上Gen-ingと類似した構文であろう。

一方、接辞による名詞化も存在する。例えば“-kata”という名詞化接辞の場合、(8)が示すように目的語は対格で標示されないが、項構造に関して主題役割の増減がないことから、英語のIng-ofの場合と同様に統語上の名詞化と考えられる。<sup>5)</sup>

(8) a. pasuta no tukuri-kata

pasta Gen cook -way(N)

‘how to cook pasta’

b. \* pasuta o tukuri-kata

pasta Acc cook -way(N)

以上、英語と日本語の語彙的名詞化・統語的名詞化の例に関してまとめると以下の(9)のような対応関係が得られる。

(9)	英語	日本語
語彙上	: a baker, a Japanese painting	?
統語上	: Ing-of	-kata
	Gen-ing	no
名詞化ではない例:	Acc-ing	?

英語と日本語に存在する名詞化を担う要素“-ing”と“no”や“-kata”について、形態上の特徴の違い(接辞が独立した形態素かの違い)は存在するものの、それぞれの名詞化表現の構造と目的語の格標示については上述のような対応関係が認められる。(日本語については空白部分に関しても興味深い事実があるが、本稿の以下の議論とは直接関連しないため、最後にAppendixとして取り上げたい。)以下3節で、目的語の格標示の違いに反映される統語上の名詞化の違いが、名詞化を担う要素の構造上の位置の違い、更には、構造格である対格の認可のメカニズムとどのように関連するかを明らかにする。

### 3. 統語上の名詞化と目的語の格標示

前節で英語と日本語の名詞化表現に対して(9)のように、目的語の格標示の仕方が違う構文を共に統語上の名詞化の例として取り扱うことを提案した。その場合、目的語の格標示の違いの原因を明確にする必要がある。本節では、対格などの構造格と呼ばれる名詞句の格について、生成文法での理論的展開に従って概観した後、構造格の認可という統語的問題が本質的に捉えようとしていることをまとめ、具体的に名詞化表現における目的語の格標示の仕組みについて考察する。

#### 3.1. 構造格

GB理論においては、構造格である主格(nominative)と対格(accusative)はそれぞれ統率(government)という概念によって定義されていた。<sup>6)7)</sup>

(10) a. NP is nominative if governed by AGR.

b. NP is objective if governed by V with the subcategorization feature:  $\_NP$  (i.e., transitive) (Chomsky 1981: 170)

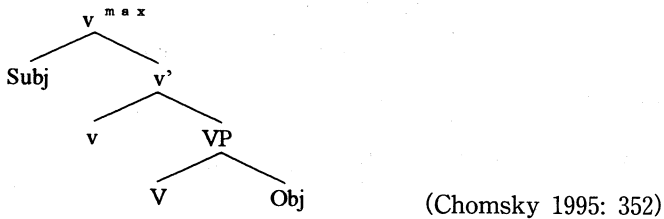
その後理論の展開によって発展した Minimalist Program (Chomsky 1992, 1995) では、統率という概念の理論的必然性の欠如により、構造格の認可は素性による照合 (checking) というメカニズムによって捉え直されるようになっている。<sup>8)</sup>

(11) a. 主格は時制要素 T がもつ格素性によって照合される。

b. 対格は動詞 V がもつ格素性によって照合される。

(12) John loves Mary.

(13)



主格については、(12)では主格主語 *John* と定形動詞 *loves* との間に人称・数の一致 (Agreement) があり、統語構造上 functional category として存在する時制要素 T によって照合される。また、目的語 *Mary* の対格の認可については動詞 *loves* が他動詞であることが統語上重要である。他動詞構文としては (13) の構造が独立的に仮定されているが、この場合、V は transitivizer の役割をする functional category であり、動詞 V は顕在的に v に繰り上がると考えよう。<sup>9)</sup>

構造格認可のメカニズムの構造上の詳細は理論の発展に応じて異なるものの、その本質は、動詞の形態に具現されているような一致 (Agreement) やそれに関連する functional category の統語上の存在の必要性に集約



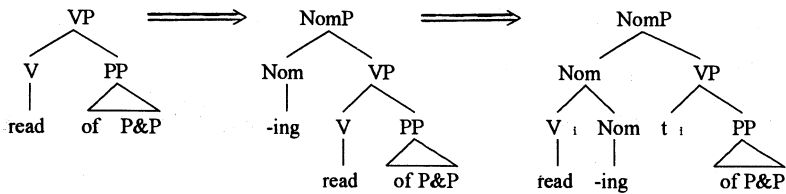
されるであろう。つまり、構造格の認可のメカニズムとしては、構造上動詞がどのような functional category と関連するかによって(14)のように認可される構造格の種類が異なることがその本質であると考えられる。

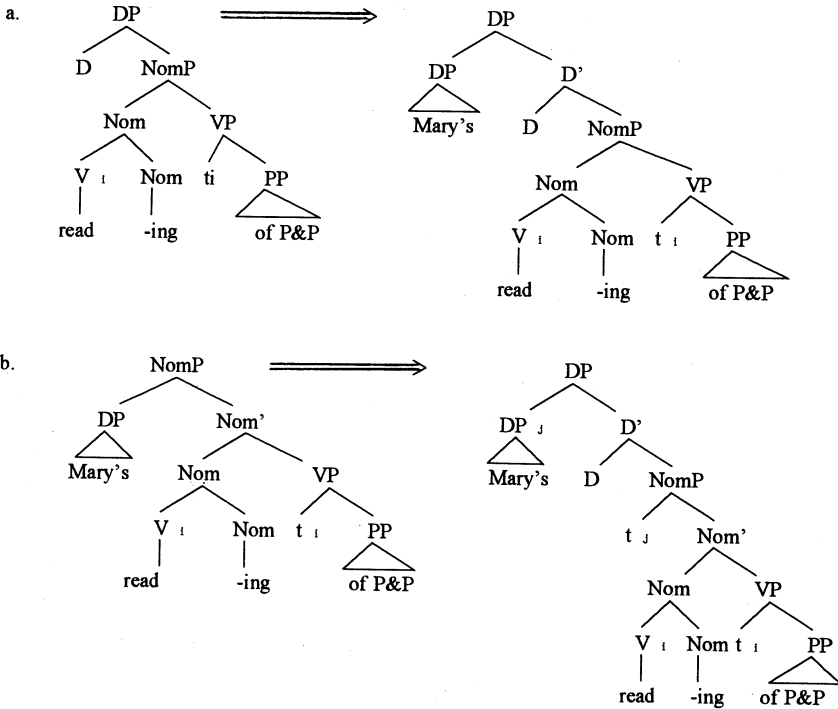
- (14) a. 動詞が定形で functional category である時制要素の T が [+Agreement] の指定を受けている場合、主格が認可される。
- b. 動詞が他動詞で transivizer の役目の functional category の v がある場合、対格が認可される。

3.2. 目的語の格標示

3.1. での構造格の認可のメカニズムに従うと、統語上の名詞化に見られる目的語の格標示の違い(対格標示するか否か)はどのように説明できるだろうか？(14b)に従うと、Ing-of の場合は統語構造中にvが存在しないためである、と言えるだろう。つまり、V には構造格を認可する能力があるにも関わらず、対格の認可に関して派生上適切な functional category と関連しないのである。(15)は Ing-of の具体的な構造である。

(15) Ing-of : Mary's reading of *Pride and Prejudice* (以下“P&P”)



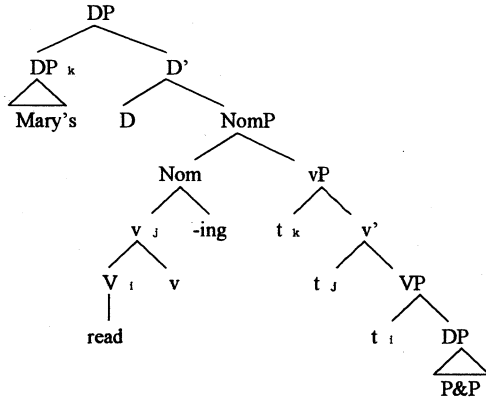


上述の様に、“Mary’s reading of *Pride and Prejudice*”という Ing-of による名詞化表現の派生の可能性としては、途中からは、(a)もしくは(b)のどちらの派生でも許されると考えられる。まず、nominalizing affix である “-ing”(=Nom) が VP を名詞化するのであるが、その時に “-ing” は、形態上独立したままではいられないという理由から V を引きつける。そのような派生のプロセスにおいて、動詞は *of* を伴った目的語名詞句を構造上認可する。更に、*Mary’s* の構造への導入については、(a)のように DP の指定部として直接導入されるか、(b)のように名詞化された範疇の指定部として導入された後で属格照合のために D に引きつけられて移動するかの 2 通りの可能性がある。<sup>10)</sup>

一方、Gen-ing の最終的な構造は (16) に示されるような構造であると分

析できる。Ing-of の場合と異なり、“-ing” が名詞化する統語範疇が VP ではなく vP である。

(16) Gen-ing : Mary's reading *Pride and Prejudice*



上記の構造では、接辞“-ing”はvPを名詞化している。Vはvに繰り上がり、目的語の対格を認可する。形態上の理由からVは最終的に“-ing”にまで引きつけられる。vPの指定部のMary'sは属格照合のため(15b)同様DPの指定部に移動する。

Ing-ofがVPの名詞化、Gen-ingがvPの名詞化と仮定することで、少なくとも次の2つの利点が挙げられるだろう。まず、Ing-ofの主語の主題役割について2通りの解釈が予測される。(15a)で主語が直接DPの指定部として導入される場合にはAgentとしては解釈されない。逆に(15b)で主語が初めに名詞化された範疇の指定部として導入される場合には、“-ing”が項構造を変化させないのでその指定部に位置する名詞句はAgentの解釈を受ける。事実、属格主語をもつIng-ofは2通りの解釈をもつ。

(17) Maria's reading of *Pride and Prejudice* received better

reviews than Anna's.

(Kratzer 1996: 128)<sup>11)</sup>

(17)のような場合、Mariaがagentiveな解釈を受ける場合とnon

-agentive な解釈として、*Pride and Prejudice* の出版180周年が公共の library における読書でもって祝われる様な場合が考えられる。こうした違いは、それぞれ (15a, b) のような2つの派生の可能性から導かれるものである。逆に、Gen-ing に関しては *Maria's* がもともと vP の指定部に導入されてその位置で Agent の解釈を受けるので、Agent 以外の主題役割を担うことはない。

2つめの利点として、Ing-of の場合に (18) のように目的語名詞句が 's を伴った属格の形態で現れ得ないことについて、構造格の認可と関連した統語的に一貫した説明が可能となる。

(18) a. A painting of John

b. John's painting

(19) a. The describing of the city

b. \*The city's describing (Valois 1991: 83)

名詞 “painting” の場合 (18) のように目的語 *John* は (18a) のように *of* 名詞句の形態でも (18b) のように属格でも可能であるのに対して、“-ing” による統語上の名詞化の場合、(19b) のように属格標示されることは不可能である。Ing-of が (15) のように構造上主格や対格の認可と同様の仕組みで *of* 名詞句を認可するならば、(19b) のように認可するべき *of* 名詞句が派生上存在しない点で問題となる。たとえ Agent の主題役割を担うことになる *Bill* が (20) のように *by* 句によって導入されているとしても、非文法的であることから、*of* 名詞句として構造上認可されなくてはならないと言える。

(20) \*The city's describing by Bill

これまでの議論に従って、日本語についても考察してみよう。“-kata” が Ing-of と同様に VP の名詞化と仮定すると、主語の解釈が2通りあることが予測される。事実 (21) の *Yamada shefu* は必ずしも Agent の主

題役割の解釈を受ける訳ではない。

(21) Yamada shefu-no pasuta-no tukuri-kata wa kantan-da

Chef Yamada-Gen pasta-Gen cook-way(N) top easy be-pres

‘Chef Yamada’s way of cooking pasta is easy’ or

‘The way of cooking pasta taught by Chef Yamada is easy.’

目的語 *pasuta* は対格標示されないが、日本語の場合 *of* 名詞句に対応するような格標示はなく属格 “no” で標示される。

では、Gen-ing に対応する vP の名詞化は存在するだろうか？日本語の場合、対格は主格と共に動詞の屈折によって認可されると分析されている。(cf. Miyagawa (1993)) 更に “no” が形態的に独立していて “-ing” のように動詞の語幹と結びつくのではないので、動詞が屈折しない形での統語上の名詞化はない。従って、(7) で示したような形式名詞 (formal noun) による名詞化は全て、節としての TP をその対象としている。(22) が示すように *kinoo* という副詞や時制表現を含む節が “no” によって名詞化されていることから明らかである。

(22) John-wa [[kinoo Mary-ga kita] no] -o shiranai

John-top yesterday Mary-Nom came FN -Acc know-Neg-pres

‘John doesn’t know that Mary came yesterday.’

以上のように、統語上の名詞化における目的語の格標示の違いは両言語において構造上同様の方法で分析することが可能であると思われる。

#### 4. 結語

英語と日本語の両言語における名詞化という現象について、従来の語彙上の名詞化・統語上の名詞化の区別を再考し、名詞化を担う要素の形態的特徴に基づく違いを明らかにした上で2言語間に対応関係が認められることを指摘した。また、生成文法の枠組みで派生に関して中心的役割を果た

している構造格の認可について、V がもともと構造格の認可に関する能力を持ち、どのような functional head と関連するかによって具体的に構造上認可される格標示が異なると分析することによって、統語上の名詞化についての更なる分析を試みた。形態上の違いにも関わらず、2 言語間で構造上共通した分析の可能性が見いだせることは興味深く、今後対象となる名詞化要素を更に増やす必要があるだろう。

## 5. Appendix

(9)の日本語に関する空白部についてであるが、語彙上の名詞化については英語と異なり、(21)のようなゼロ接辞の存在も仮定されるだろう。

(23) Kono kaban-wa mitame-wa waru-i ga [[moti] -0

This bag-top looking bad-pres but wear

-ga i-i

-Nom good-pres

This bag does not look good, but it lasts long.'

また、Acc-ing に対応する構文の可能性としては、(24)のような構文が挙げられる。

(24) hito no mitogamuru o shirazu

people blame not know

'not knowing that others blamed them' (Miyagawa 1989: 206)

Old Japanese においては動詞の屈折語尾として、Conclusive form (終止形) と Attributive form (連体形) があり、そのうちの Attributive form を用いた節は対格標示されて直接動詞の項として現れることができた。<sup>12)</sup> “mitoga-muru” 自体は動詞であるので、名詞化に関与する要素はなく、Acc-ing と非常に類似した構文であると言えるだろう。この点については更なる比較検討が必要だと思われる。

## 注

- 1) Horn (1975), Reuland (1983), Baker (1985), Abney (1987), Suzuki (1988, 1994), Nakajima (1991), Valois (1991), Matsuoka (1994)などを参照のこと。
- 2) Lieber(1992: 117)を参照のこと。
- 3) Gen-ingとAcc-ingの範疇を違うものとする分析のなかでも、主語の格標示の違い(属格か対格か)については意見が分かれる。特に、Nakajima(1991), Suzuki(1994), Matsuoka(1994)などを参照のこと。
- 4) 同じ形式名詞である“koto”との比較に関しては Nakau(1973), Kubo(1994)などを参照のこと。
- 5) 別の視点からの分析として、影山 (1993: 358-359)を参照のこと。
- 6) “objective”との表記は本稿で述べるところの“対格”と同じである。
- 7) 統率の定義については Chomsky(1981)を参照のこと。
- 8) 照合のメカニズムについては Chomsky(1992, 1995)などを参照のこと。
- 9) “functional category”としては C,T,Dが挙げられるが、vも格の認可の点などに関しては lexical categoryではなく functional categoryの1つであると考えられる。
- 10) 'sの扱いについては、Dの主要部に位置するのではなく、MaryのCase-markerとする。属格の認可に関する詳細は本稿では扱わない。
- 11) Kratzer(1996)では、同じ現象を VoiceP という構造をたてて説明している。
- 12) 英語と日本語との格標示の歴史的変化について Miyagawa(1989)では興味深い対応関係が示されている。

## 主要参考文献

- Abney, Steven (1987) *The English Noun Phrases in Its Sentential Aspect*,  
Doctoral dissertation, MIT.
- Baker, Mark (1985) “Syntactic Affixation and English Gerunds,” *WCCFL* 4,  
1-11.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding: The Pisa  
Lectures*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1992) *A Minimalist Program for Linguistic Theory*, *MIT  
Occasional Papers in Linguistics* 1, Department of Linguistics and Phi-  
losophy, MIT.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge,

MA.

- Horn, George (1975) "On the Nonsentential Nature of the POSS-ing Construction," *Linguistic Analysis* 1, 333-387.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- Kratzer, Angelica (1996) "Severing the External Argument from Its Verb," *Phrase Structure and Lexicon*, eds. by Johan Rooryck and Laurie Zaring, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Kubo, Miori (1994) *Japanese Syntactic Structures and Their Constructional Meanings*, Hituzi Syobo, Tokyo.
- Lieber, Rochelle (1992) *Deconstructing Morphology: Word Formation in Syntactic Theory*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Matsuoka, Mikinari (1994) "The Accusative-ing Construction and the Feature Checking Theory," *Tsukuba English Studies* 13, 117-146.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese: Syntax and Semantics* Volume 22, Academic Press, San Diego, CA.
- Miyagawa, Shigeru (1993) "Case, Agreement, and Ga / No Conversion," *Japanese/Korean Linguistics* Volume 3, ed. by Soonja Choi, 221-235, Stanford Linguistics Association.
- Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Doctoral dissertation, the University of Connecticut.
- Nakajima, Heizo (1991) "Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP," *Topics in Small Clauses: Proceedings of Tokyo Small Clause Festival 1*, ed. by Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, 39-57, Kurosio, Tokyo.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha, Tokyo.
- Reuland, Eric J. (1983) "Governing-ing," *Linguistic Inquiry* 14, 101-136.
- Suzuki, Tatsuya (1988) *The Structure of English Gerunds*, Doctoral dissertation, University of Washington.
- Suzuki, Tatsuya (1994) "A Note on ACC-ING in the Minimalist Program Theory," paper presented at the 66th National Conference of the English Literary Society of Japan.
- Valois, Daniel (1991) *The Internal Syntax of DP*, Doctoral dissertation, UCLA.